

日本英文学会 中国四国支部 第71回大会 プログラム・梗概

会期：2018年10月27日(土)、28日(日)

会場：鳥取大学

〒680-8550 鳥取県鳥取市湖山町南4-101

日本英文学会中国四国支部 事務局

〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1

広島大学外国語教育研究センター 榎田一路研究室内

TEL 082-424-6446

第一日 10月27日(土)(参加受付 12:30-)

開会式・総会 (12:45-13:15 共通教育棟3階 C31 講義室)

	(司会) 鳥取大学教授	福安勝則
開会の辞	日本英文学会中国四国支部支部長	吉中孝志
挨拶	鳥取大学理事・副学長	中島廣光
総会		

研究発表 (13:30-16:40)

第1発表 13:30-14:10	第2発表 14:15-14:55
第3発表 15:15-15:55	第4発表 16:00-16:40

第1室 (共通教育棟3階 C32 講義室)

	(司会) 福山大学教授	中尾佳行
1. mustとhave toの比較 —根源的用法と認知的用法の観点から—	広島大学大学院博士課程後期	合田優子
2. 邦画の視聴覚翻訳における聴覚非言語・パラ言語の脚色 —『武士の一分』の場合—	倉敷市立短期大学教授	安達励人
	(司会) 広島大学教授	小野章
3. 詩におけるフォーカス・オン・フォームを実践するための発問の開発 広島大学大学院修士課程	内屋敷強	
4. 「意味の色合いと度合い」—音声の研究と操作対象の拡張—消音・脱落・抑揚 —音声による綿密と緩和の意味パレット：残像・記憶・意思疎通の保持と持続—	秀明大学教授	久部和彦

第2室 (共通教育棟3階 D31 講義室)

	(司会) 広島工業大学准教授	楠木佳子
1. ジョン・ダンの『ピアタナトス』と詩作品との関連性の考察 広島大学大学院博士課程前期	横山竜一郎	
2. 砕かれた心、愛の亡霊 —初期近代英詩における恋の治療法—	広島大学助教	松本舞
	(司会) 鳥根県立大学教授	松浦雄二
3. 忘れられた詩人たち —ウィリアム・ハビントン(1605-1654年)の kozmick・eskaypizm—	樹真間仁	
4. 【招待発表】受難をどう描くか・描かないか：ハーバートの場合 神戸市外国語大学教授	西川健誠	

第3室 (共通教育棟3階 D33 講義室)

- (司会) 松山大学教授 辻 祥 子
1. 哄笑には哄笑をという戦略と、笑いが可能にする内なる他者との対話
—ホーソーンの短編と現代日本小説の比較を通して—
- 岡山大学教授 中 谷 ひとみ
- (司会) 防衛医科大学校助教 矢 口 朱 美
2. カリカチュアから見るテロリストの類型
- 就実大学教授 渡 辺 浩
- (司会) 千葉工業大学准教授 三 村 尚 央
3. *Under the Volcano* におけるキホーティズム
—Hugh Frimin の場合—
- 山口東京理科大学講師 風 早 悟 史
4. 赦されるのは時間の問題
—Ian McEwan の *Atonement* における時系列操作—
- 山口大学教授 宮 原 一 成

第4室 (共通教育棟2階 D21 講義室)

- (司会) 愛知教育大学教授 道 木 一 弘
1. *A Portrait of the Artist as a Young Man* の鳥表象と芸術家像再考
—イェイツとシェリー作品とのつながり—
- 熊本高等専門学校准教授 岩 下 いずみ
2. *Amnesia and Anamnesis: Joyce, Fenianism, and the 'language of memory'*
- 岡山大学講師 B r i a n F o x
- (司会) 県立広島大学教授 高 橋 渡
3. ポスト大飢饉教養小説の政治学
—*A Portrait of the Artist as a Young Man* と *The Next Time* の比較を通して—
- 安田女子大学准教授 田多良 俊 樹
4. 『若い芸術家の肖像』の学校描写にみるジョイスの階級意識
- 西南学院大学教授 河 原 真 也

特別講演 (16:50-17:50 共通教育棟3階 C31 講義室)

(司会) 安田女子大学名誉教授 中 川 憲

演題: Agatha Christie、スタイルの秘密—Hercule Poirot の英語を中心に

講師: 京都大学名誉教授 豊 田 昌 倫

懇親会 (18:00-20:00)

(司会) 鳥取大学教授 和田 綾子

会場： 鳥取大学生協第二食堂

会費： 事前Web申し込み5,000円(当日申し込みは6,000円)

※日本英文学会中国四国支部HPよりお申し込みください

第二日 10月28日(日)**シンポジウム** (10:00-13:00 共通教育棟3階 C31講義室)

題目：人間性の更新

(司会・講師) 安田女子大学講師 島 克也

「わたしは機械でありたくない」——ヴォネガットのSF的想像力と人間性の探求

(講師) 尚絅学院大学准教授 中山 悟 視

融合と転生——SF的異類婚姻譚と視覚映像文化の現在

(講師) 尾道市立大学准教授 小畑 拓也

人工生命の生の意味——哲学的SFの観点から

(講師) 広島工業大学助教 萬屋 博喜

閉会式 (13:00- 共通教育棟3階 C31講義室)

(司会) 鳥取大学教授 福安 勝則

閉会の辞

日本英文学会中国四国支部副支部長 高口 圭 轉

第一日

—— 研 究 発 表 ——

mustとhave toの比較 —根源的用法と認知的用法の観点から—

広島大学大学院博士課程後期 合 田 優 子

本研究は英語のモダリティの1つである助動詞 *must* と準助動詞 *have to* の根源的用法と認知的用法の2つの用法に注目し、考察を行う。*must* と *have to* には基本的に、「～しなければならない」という根源的用法と「～にちがいない」という認知的用法がある。

柏野(2002)は、2つの用法の考察を通して、*must* と *have to* の違いは主観的か客観的かという点であると述べている。それを利用して、語用論的な転用という概念を使い、両者の考察を提示している。しかしながら、柏野(2002)は、根源的モダリティ *must* の勧誘的な用法を見落としている。それゆえ、本研究では、*must* の勧誘的な用法を踏まえた上で、認知的用法も取り込み、*must* と *have to* の違いを再検討する。使用する枠組みは、Kratzer (1991, 2012) の可能世界意味論である。彼女の理論は可能世界を量化することによって、モダリティを統一的に把握している。道具立ては①様相力②様相基盤③順序源である。

さらに、*must*, *have to* に関して、現実世界(発話時点)と他の可能世界の関わりに着目する。特に、根源的用法の場合では義務の源が話し手であるのかという観点と、一方で、認知的用法では、推論を発話する際の証拠がどこからくるのかという観点である。以上の2つの点が会話状況を踏まえた上での意味論的な違いであり、本研究において考察する。

邦画の視聴覚翻訳における聴覚非言語・パラ言語の脚色 —『武士の一分』の場合—

倉敷市立短期大学教授 安 達 励 人

本研究の目的は、邦画『武士の一分』とその英語版 *Love and Honor* 中の沈黙の比較分析を通して、映画の英訳過程において背景音楽や効果音などの聴覚非言語やパラ言語に加えられている脚色的一端を明らかにすることである。

視聴覚メディアのテキストは、①字幕などの視覚言語、②音声セリフなどの聴覚言語、③映像などの視覚非言語、④効果音や背景音楽などの聴覚非言語の4種類のコードに分類できる。先行研究では視覚言語や聴覚言語という言語面の分析が先行しており、聴覚非言語・パラ言語の分析は、言語面の研究成果を周辺からサポートするものとして捉えられることが多い。確かに、言語外の音声情報は言語による情報伝達を補完する役割を担っているが、同時に、異文化コミュニケーションにおける障壁となる危険もはらんでいる。

本研究では、沈黙数が多いジャンルであるドラマから『武士の一分』を採り上げた。まず日米版のそれぞれに出現する沈黙をオーディオ編集ソフトによって検出した後、沈黙の脚色に用いられている方略について考察を加えた。

その結果、『武士の一分』の英訳過程において、セリフに対しては原作に忠実な翻訳が行われる反面、聴覚非言語・パラ言語には文化依存度の高い音声要素の排除をはじめとする脚色が施さ

れている事例が明らかになった。異文化コミュニケーションの視点から、視聴覚翻訳における言語面と非言語面の翻訳方略のねじれに関するさらなる研究が必要であろう。

詩におけるフォーカス・オン・フォームを実践するための発問の開発

広島大学大学院修士課程 うちやしき つよし
内屋敷 強

詩はその言語の有標性ゆえに、意味理解と言語形式は不可分の関係にあるテキストである。すなわち、詩の意味理解を深めるために、読者は自ずと言語形式に注意を払わなければならない。従って、意味理解を促進するために、言語形式に注意を向けさせるフォーカス・オン・フォームを実践しうるテキストであると考ええる。こうした特徴を持つ詩は、第二言語習得の観点から有用な教材となりうる。

しかし、日本の英語教育では、詩は難解であるとか、教えるににくいといった理由で、敬遠されがちである。その理由として、詩は多くの場合、補助となる発問が添えられておらず、また書き換えられずに、原文でそのまま掲載されていることがあげられる。しかし、原文であるが故に言語形式に注意を向けさせやすいとも考えられる。そこで本論では、そうした詩の特徴を有効に活用するために、発問を開発して、フォーカス・オン・フォームを実践することを提案する。従来、発問は意味理解を促進する補助的な役割を果たしているが、先述したように詩においては、意味理解と言語形式を不可分であるため、同時に、言語形式にも注意を向けさせ、より深い意味理解を促すことができると考える。本論ではそうした観点から、詩テキストの発問を開発し、詩におけるフォーカス・オン・フォームを実践するための可能性を探りたい。

「意味の色合いと度合い」—音声の研究と操作対象の拡張—消音・脱落・抑揚

—音声による綿密と緩和の意味パレット：残像・記憶・意思疎通の保持と持続—

秀明大学教授 ひさ べ かず ひこ
久 部 和 彦

「意味の色合いと度合い」の具体的な論考の主題は音声学で扱われる「抑揚」や「強勢」、「消音と脱落」、「同化と異化」、「音節と拍(モーラ)」、「重音省略(ハプロロジー)」や「サイレントE」等が意味や印象形成にどのような役割(ロール)と機能(ファンクション)を有しているかを探究することにある。音声学的な機能の分類や分析を通して、意味操作への貢献度を数量的に計量する意義や、微妙なニュアンスの意味解釈と音のコントロールの有用性の相互補完性、意図等を動的に演出するために極端な高低差を活用したピッチコントロール、意味の強弱という捉え方の問題、複雑化やぼかし方、緻密さの印象形成力等、音型や抑揚の分類を通して、最新の意味と音声の関連性を議論する。また、辞書での短母音の語が、長母音化され、意味的には好感や賞賛を延伸する技量として変更されうる事例等を挙げ、そのパターンや応用可能性について技量指導に含める優位性を序列化する。音声的な意味調節の裏技や、典型的な「意味あいの演出力」に関する事例研究がもつ課題についても、各々の綿密さや繊細さに係わる点を明らかにする。微妙で変化に富んだ音や息の活用や省略など、語用論の背景知の代入を利用するのではなく、「音を意識化してコントロールする」技量を通して、意味の微妙さや背景の「像」を想起させる指導順序が長期学修の基盤形成に優位性を有するのではないかという問題提起も行なう。

ジョン・ダンの『ビアタナトス』と詩作品との関連性の考察

広島大学大学院博士課程前期 横山 竜一郎

初期近代イギリスの詩人ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) は、1608年に自殺の問題を西洋で初めて本格的に論じた散文作品『ビアタナトス』(*Biathanatos*)を執筆した。死後1647年に出版されたこの作品は、西洋自殺観の歴史において重要な位置付けがされている一方で、同時期にダンが幾篇かの詩作品も書いていたという事実はあまり注目されていない。先行研究においても、『ビアタナトス』と彼の詩作品はそれぞれ独立したものとして扱われており、両者の関連性は指摘されることがほとんどなかった。そこで本発表では、1608年頃に執筆されたと推定されている宗教詩を中心に、両作品に見られる、キリストの死や病の治療といったモチーフに焦点を当てながら、ダンの『ビアタナトス』と詩作品との関係を探っていく。これによって、散文と韻文という異なる表現形態が相補的にダンの自殺観を形成していることを明らかにしたい。

砕かれた心、愛の亡霊

——初期近代英詩における恋の治療法

広島大学助教 松本 舞

恋に悩む詩人たちは、詩作品の中に、愛しいひとの姿を感じようと、恋人を永遠化しようと試みてきた。17世紀の英国では、ロバート・バートン (Robert Burton, 1577-1640) などの医師たちが恋のメランコリーの治療法を論じたが、完璧なる恋の治療法は見出されなかった。詩人たちは、時には、死して尚、復活の際に恋人とで会うための工夫を凝らし、時には、愛の亡霊として、枕元によみがえらせようと試みる。

本発表では、エイブラハム・カウリー (Abraham Cowley, 1618-1667) の恋愛詩集『ミストレス』(*The Mistress*, 1656) の詩作品に表される、砕かれた心や愛の亡霊の描写を中心に、17世紀に出版された医学論文やエンブレム集を参照しながら、ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631)、サー・ジョン・サックリング (Sir John Suckling, 1609-1642) などの初期近代英詩における、愛の死と復活の描写をみていく。そして、17世紀という時代において、恋に悩める詩人たちが新たに見出した、愛の苦悩に対する治療法を再確認することにした。

忘れられた詩人たち

——ウィリアム・ハビントン(1605-1654年)のゴズミック・エスケイピズム

樹真間 仁

1586年、カトリック教徒がエリザベス1世の暗殺をもくろんだとされる、いわゆるバビントン陰謀事件に連座した廉で、ハビントンの父親は6年の間、ロンドン塔に幽閉され、彼の叔父は処刑された。さらに父親は、ジェームズ1世もろとも議会を爆破しようとしたとされる1605年の火薬陰謀事件で、カトリック教徒を匿った罪で困難な状況に陥った。ハビントンの詩は、当然ながら色濃くカトリック的な要素を帯びている。文学的な系譜の観点からは、ペンの徒であり、王党派詩人であるハビントンは、第一代ポイス男爵ウィリアム・ハーバートの反対を押し切って、彼の次女ルーシーと秘密結婚し、彼女を称える詩集『カスターラ』を1634年に匿名で出版した。シェイクスピアが『ソネット集』を捧げた「美青年」、'Mr. W.H.'の候補者の一人、第三代ペンブルック

公爵の父であり、詩人サー・フィリップ・シドニーの妹メアリーを妻とした第二代ペンブルック公爵ヘンリー・ハーバートは、このポイス男爵の甥にあたる。また、詩人ジョージ・ハーバートもペンブルック公爵家の親族であり、ハーバートの母親マグダレンは、ジョン・ダンのパトロンであったことはよく知られている。ハビントンは、このように興味深い人脈と背景を持っているにもかかわらず通常の英文学史では言及されることはない。本発表では、彼が、1640年に改定出版した増補版『カスターラ』を分析して、「ハブられる」のが当然の詩人なのかを考察する。

受難をどう描くか・描かないか：ハーバートの場合

神戸市外国語大学教授 西川健誠

宗教改革期、聖餐を神の子による犠牲の実効ある反復と見るか、犠牲の記念に過ぎないと見るかの論争の形で、受難の再現可能性が神学上の問題となった。これと並行して、受難を表象＝再現(re-present)され得る事績として描くか、一度限りの過去の事績として描くか、そもそも描く事を控えるかの選択という形で、文学でも同じ問題が意識されていた。本発表ではハーバート(George Herbert, 1593-1633)の受難表象を取り上げたい

ハーバートの受難表象の場合、詩人としての自意識が強く出ているのが特徴だ。受難を含む神の子の事績を詩に歌う事は宗教詩人にとり当然の召命だが、他方聖書は「主は人が常に悪いことばかりを心に思い計っているのを見て」(創世記6:5)とある通り(欽定訳は「思い計り」の部分に「想像力」とも訳し得る imagination の語を用いている)、人の思い計り＝想像力の邪さを指摘する。キリスト教の中核的事績を語るという使命感を持つ一方、その事績を語るだけの功が自らにあるかという疑いを、ハーバートは持っていた。この疑い自体がかれの詩のテーマとなっている。

本発表はハーバートの詩集『寺院』冒頭に現れている受難を扱った詩群を、かれの受難表象の理論と実践の例として取り上げる。語り得ない、しかし語らずにはいられない出来事を、詩人が、語り方まで含めどのように語っているかについて、論じてみたい。

哄笑には哄笑をという戦略と、笑いが可能にする内なる他者との対話

—ホーソーンの短編と現代日本小説の比較を通して—

岡山大学教授 中谷ひとみ

笑いの効用については、笑いヨガの健康効果から「意味構造の炸裂と主体の流動化をもたらし」新しい主体の契機となるなど、様々な言説がある。ホーソーンの短編には笑いが重要な要素となっているものがある。自嘲的にあるいは侮蔑的に町の人々を笑うイーサン、森で妻の罪を仄めかされて笑う鬼と化すグッドマン・ブラウン、そして「僕の親戚モリヌー少佐」のロビンを想起する。生来の抜け目なさや野望を持ち、少佐の助けを借りて都会でひとかどの人物になろうとする18歳のロビンは、狂ったように笑いながら少佐を踏みつけて進む暴徒の前に、彼ら以上に大声で笑う。なぜロビンは哄笑にそれ以上の哄笑で反応したのか。この笑いはブラウン青年の抵抗と自己防衛の笑いと同様のものだろうか。当発表ではこの疑問について、若千竹佐子の『おらおらでひとりいぐも』(2017)とも比較しながら論を進める。主人公は最愛の夫に死なれ、子供らとも疎遠になり、淋しさのどん底にいるが思わず笑ってしまう。そして夫の墓に真っ赤なカラスウリを見て笑った時、こみ上げる笑いがこみ上げる意欲であること、まだ自分に人生と戦う力があることを知る。こうして夫の死後数か月、悲しみながらも笑い、内なる他者と対話しながら再生していくが、ロビン

少年は再起可能であろうか。二つの小説を比べながら笑いの機能について考察したい。

カリカチュアから見るテロリストの類型

就実大学教授 わた なべ ひろし
渡 辺 浩

Joseph Conradの*The Secret Agent* (1907)の序文にはフォード (Ford Madox Ford) と考えられる友人との会話の中でアナーキストに関する批判を取り上げている。その中で「半ば狂気のポーズの卑劣さ」(“the contemptible aspect of the half-crazy pose”)といた強烈に非難する言葉を取り上げている。コンラッドが描く本格的なアナーキスト批判は“The Informer” (1906)から明確に現われ、*The Secret Agent*に至ってさらに発展し、*Under Western Eyes* (1911)に至るまでその強いカリカチュア(戯画化)を用いた分析を含んでいる。

確かにテロリストの問題分析はこれらの作品に関してはある程度行われているが、この研究発表においては特に関係が深い“The Informer”から*The Secret Agent*に至る発展性を視野に入れながら、コンラッドの描くテロリストの類型を分析し、作家が批判するテロリスト像を再確認することを目的とする。また現在の視点から様々なタイプのテロリスト、またテロリズムが存在するが、コンラッドがとらえたテロリストとはどのような類型に属するのかを再考する。

*Under the Volcano*におけるキホーティズム

—Hugh Firminの場合

山口東京理科大学講師 かざ はや さと し
風 早 悟 史

Malcolm Lowryの*Under the Volcano* (1947)の主要人物の一人であるHugh Firminは演技性の強い男である。たとえば、学生の頃には突然汽船の乗組員になり、音楽家としての名を売ろうとした。しかし同時に、そうして得た評判が一時のまやかしかでしかないことも本人は理解していた。彼が演技を繰り返すのは、自分が何者にもなれないことを知っているからであると言えるだろう。物語の重要な背景を成すスペイン内戦は、このような虚しさを抱えるHughに本物の英雄になる機会を与えるかに思われたが、実際は罪の意識を刻み付けただけだった。1938年11月の死者の日(the Day of the Dead)のメキシコからエプロ河の激戦地に何度も思いを馳せては、そこで苦戦する共和国軍に対して自分は傍観者であり裏切り者であるという後ろめたさを抱く。また、主人公である元イギリス領事のGeoffrey Firminと彼の元妻であるYvonneと一緒にバスで移動している最中に発見した重傷のインディオを救助しようとするも、結局は見捨ててしまうHughの振る舞いには、内戦の暴力に対する彼の無力を重ね合わせることができる。何者にもなれないこの閉塞した現実から逃れるかのように、彼は空想の中で戦争の英雄になろうとする。

本発表では、スペイン内戦という巨大な時代のうねりに囚われながらも自己を模索するHughの言葉と思考の様態について、この小説全体の特徴でもある自在に変化する話法に注意を払いながら論じる。

赦されるのは時間の問題

— Ian McEwan の *Atonement* における時系列操作

山口大学教授 宮原一成

Ian McEwan の *Atonement* (2001) は、そのタイトルが示すとおり、償い・罪滅ぼしをテーマとする小説である。具体的に言うと、主人公 Briony Tallis が13歳の時に行った不作為の偽証により姉 Cecilia の恋人 Robbie にかけてしまった冤罪について、成長したブライオニーが試みる贖罪の物語である。語り手でもある彼女は、18歳の自分がロビーとシシーリアに直接謝罪する場面を描いているのだが、その謝罪行動を後押ししたのは1通の手紙——彼女が文芸雑誌に投稿した短編小説原稿に対する不採用通知の手紙だった。

管見のかぎりこれまで指摘されていないことだが、この重要な手紙をブライオニーが受けとったのはいつなのか、という点について、彼女の記述はじつは矛盾を抱えている。この矛盾は、彼女が無意識の自己弁護のために時系列を操作した痕跡ではないだろうか。時間にまつわるこの印象操作は、くだんの謝罪場面が本当は架空の創作だったという事実に加えて、ブライオニーの罪滅ぼし行動に対する評価に負の影響を及ぼすものだと言える。だが一方でこのマイナス材料は、Derrida や Levinas や Sarthou-Lajus などが想定する〈赦しの純粹形〉の可能性についての思索へと、読者を誘う効果を秘めているとも考えられるのである。

A Portrait of the Artist as a Young Man の鳥表象と芸術家像再考

— イェイツとシェリー作品とのつながり

熊本高等専門学校准教授 岩下いずみ

James Joyce 作 *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916, 以下 *Portrait* と略記) 第5章3節冒頭、主人公 Stephen は空を飛ぶツバメを眺め「鳥占い」に思いをはせる。「鳥占い師 (augur: ラテン語で鳥を見る者の意)」は、古代ローマ時代において鳥の動きなどを見て国事を占った。Stephen は自分の今後を占う場面で、鳥占いと共に William Butler Yeats 作 *The Countess Cathleen* (1892) のツバメに関するセリフを想起するが、この作品の詩人 Aleel にも鳥を通して災いを予言するという鳥占いとの共通点が見られる。本発表では、鳥占い師が鳥を視覚でとらえ理解するという特徴が、視覚を介して対象を作品へ昇華する芸術家の側面へと継承されたと捉えたい。その際、*Portrait* に影響を与えた Percy Bysshe Shelley 作 “A Defence of Poetry” (1840) などにも視覚と芸術家に関する重要な示唆が見られるため、これらもあわせて考察対象とする。鳥表象と芸術家におけるイェイツとシェリー作品とのつながりを通して、芸術家の飛翔を描いたとされる *Portrait* を再検討し、ジョイスが示した芸術家像の新たな一面の解説を試みるのが本発表の目的である。

Amnesia and Anamnesis: Joyce, Fenianism, and the ‘language of memory’

岡山大学講師 Brian Fox

Taking Stephen Dedalus’s connections to Fenianism as depicted in *A Portrait of the Artist as a Young Man* and the early chapters of *Ulysses* as a focal point, this paper is primarily concerned with how competing and overlapping forms of memory (individual, collective, archival, oral, syncretic) are present in not only Joyce’s writing (i.e. the texts themselves), but in the very act of writing itself (i.e. Joyce’s textual

practices).

To do this, I will focus on how oral history and the collective memory of Fenianism in Ireland in the years between the death of Parnell and the War of Independence as encoded in the Irish Military Archives can be applied to Joyce's own encoded memory and record in his fiction of this separatist wing of Irish nationalism that has in recent years received significant critical attention. Here, Stephen's relationships with John Casey in *A Portrait* and Kevin Egan in *Ulysses* are crucial. Then, I will complement and expand the discussion of oral history and the archives with an analysis of specific instances of Joyce's use of 'objective', syncretic historical sources. Chief among these will be his *Encyclopedia Britannica* notes in the National Library of Ireland papers (2002). There he records notes from an entry on the Fenians, despite apparently having little need for them and even, on one occasion, correcting a mistake in the encyclopedia's entry.

This paper will conclude that these connected instances reveal the extent to which Joyce came to perceive history as an imaginative, syncretic merging of objective and subjective realities, as exemplified in the development of his own textual practices.

ポスト大飢饉教養小説の政治学

—*A Portrait of the Artist as a Young Man* と *The Next Time* の比較を通して

安田女子大学准教授 田多良 俊 樹

大学生の James Joyce (1882-1941) が、19世紀アイルランドの詩人 James Clarence Mangan (1803-49) について口頭発表を行った際、同じ大学に通う Louis J. Walsh (1880-1942) はそれを糾弾した。Walsh によれば、Joyce は、Mangan が1848年に対英蜂起した青年アイルランド党の一員であったことを無視しており、愛国精神に反しているというのだ。

Mangan をめぐる Joyce と Walsh の軋轢には、アイルランド大飢饉に対して、ポスト大飢饉世代のアイルランド人青年が取りうる対照的な態度が見受けられる。Mangan が大飢饉をリアルタイムで歌い上げた「大飢饉詩人」であり、青年アイルランド党の蜂起は大飢饉の最中に敢行されたという事実に注意しよう。つまり、Walsh は、アイルランドの国民的悲劇としての大飢饉に対する Joyce の「無視」を問題にしていたと考えられる。

興味深いことに、その後の Joyce と Walsh はそれぞれ、自伝的な教養小説を書いている。すなわち、*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1914) と *The Next Time: A Story of 'Forty-Eight* (1919) である。注目すべきは、これらの小説が、これもまた対照的な方法で大飢饉の記憶を扱っているという点である。当然、両小説における大飢饉表象の差異は、Mangan をめぐる大学時代の Joyce と Walsh の対立に起源するはずだ。

このような観点から、本発表では、Joyce と Walsh の教養小説における大飢饉表象を比較分析し、ポスト大飢饉世代の作家が、大飢饉の記憶をどのように扱っているのかを検討する。合わせて、大飢饉の伝承と忌避という問題系と、教養小説というジャンルとの関係性についても考察してみたい。

『若い芸術家の肖像』の学校描写にみるジョイスの階級意識

西南学院大学教授 河原真也

ジェイムズ・ジョイスの自伝的小説『若い芸術家の肖像』(1916)には、イエズス会系の寄宿舎学校、そして大学に通う主人公スティーヴンとその級友たちの姿が描きだされている。「じゃがいも大飢饉」以降ナショナリズムが勃興すると同時に、カトリック信徒の社会の中枢に占める割合が増加する中で、カトリック・エリート層でもあったスティーヴンや彼の級友たちの衣服、ことばのアクセント、職業観などの記述からは、被害者史観に基づく「貧しい」アイルランド像とはかけ離れた当時の社会の多層性が読み取れよう。かつて C. S. Andrews は、アイルランドにおける中流階級を子弟の通う学校によって上層・中層・下層の3つの層に分けたが、青年期のジョイスはその基準に従えば、中流下層階級に属していたと考えられる。にもかかわらず、作品中ではジョイスの“alter ego”であるスティーヴンには、中流下層階級にみられる行動パターンを取らせず、級友たちと同等、またはそれよりも上の視点で行動させている記述が目につく。本発表では、アイルランドの階級を考える際に有益な情報を与えてくれる「農村」に関する描写も参照しながら、スティーヴンが通うイエズス会系の学校でのやりとりをもとに、ジョイスの自身の階級意識をあきらかにしてみたい。

第二日

—— シンポジウム ——

人間性の更新

(司会・講師) 安田女子大学講師 島 克也

2010年代を生きる日本人に最も不安を与えているものはなんだろうか。それはテロでも少子化でも財政赤字でもなく、人工知能であるように思える。人工知能が我々の職を奪い、我々の生活を監視し、我々の支配者となった世界は *The Terminator* (1984) や *The Matrix* (1999) などの映画で映像化されているが、物語の結末では人間が人工知能に勝利するため、我々は絵空事を描く娯楽SFとしてこれらの映画を楽しむことができた。しかし現在では、ビッグデータやディープラーニングという現実のテクノロジーが我々の生活を左右し、NHKは人工知能に関する特集番組を繰り返し放映することによって、人々に得体の知れない恐怖を与えている。今、自分が会話をしているコールセンターのオペレーターが実在の人間ではない可能性はすでに存在しており、我々はそのような不安や恐怖から逃れるために、SNSゲームでレアキャラを集めることに熱中し、インスタ映えするオシャレな場所を探し回っているのかもしれない。

本シンポジウムは、人工知能の是非について文学の方面から考察するものではなく、人工知能の発達が、我々にとって最も根源的な「人間とは何か」という問いに、我々が再び取り組まざるを得ない状況を生み出していることに注目するものである。我々と人工知能を区別するものは何か。我々は何を根拠に自らを人間と呼ぶことができるのか。我々は、過去に存在した人間と同種の人間なのか。そもそも「我々」という代名詞によって特定される集団が存在するのか。これらの問いに最も真剣に取り組んできた芸術ジャンルがSFであることはいうまでもない。本シンポジウムでは、4人のSFオタクが古今東西のさまざまな小説・映画・アニメ・マンガ・ゲームを引き合いに出しながら、人間を人間たらしめる「人間性」は日々更新されてゆくものであることを訴える。このシンポジウムが、現実空間で開催され、「人間」に届けられるものであることを願いながら……

「わたしは機械でありたくない」—— ヴォネガットのSF的想像力と人間性の探求

(講師) 尚絅学院大学准教授 中山 悟 視

SFというジャンルは、*Frankenstein* (1818) なる「怪物」の誕生に端を発すると言われる。人間ならざるものを生み出したその起源に触れるとき、SFは19世紀以来、「人間とは何か」を問い続けてきたことが想起される。

SF作家と目されることの多いカート・ヴォネガットが追求してきたテーマの多くも、やはり人間性の問題に関わっている。ヴォネガットは、たとえば、テクノロジーの発展が引き起こす精神的な退廃に注目し、SF的モチーフを多用した物語を紡ぐことで、アメリカ社会に警鐘を鳴らした。本発表では、ヴォネガットが描いた人間性の「更新」とその危うさについて、いくつかのSF的作品を中心に考察していく。可能であれば、ヴォネガットが意識的だった19世紀末から20世紀前半にも見られる「更新」の「兆し」のようなものにも言及していきたい。

融合と転生——SF的異類婚姻譚と視覚映像文化の現在

(講師) 尾道市立大学准教授 小畑拓也

SFにおける人間の定義をめぐる問いは、エイリアン、ミュータント、人造人間などの寓意性の強い他者表象が際立たせる自他の境界を確定するプロセスとして、ドラマティックに表現されてきた。一方、そうした物語が境界の揺らぎ・越境の可能性を示唆することも少なくない。サイボーグやキメラなどの混成体・越境者というSF的モチーフは、『*Ghost in the Shell* (2017)、『*DEVILMAN crybaby*』(2018)などの例に見られる、複数の文化圏を横断する魅惑的なアイコンを生み出している。本発表では、日本のSF映像文化に関心を持つクリエイターたちが手がけた『*Steven Universe* (2013-)と『*The Shape of Water* (2017)を中心に、SF的異類婚姻譚が展開する人間性の揺らぎを探ってゆく。

人工生命の生の意味——哲学的SFの観点から

(講師) 広島工業大学助教 萬屋博喜

人工知能を扱った哲学的SFと聞いて、真っ先に思い浮かべるのは『*Blade Runner* (1982)だろう。だが、あまりにも定番に囚われすぎると、鋭い哲学的感性をもって書かれたSF作品の個性が見過ごされてしまう可能性がある。

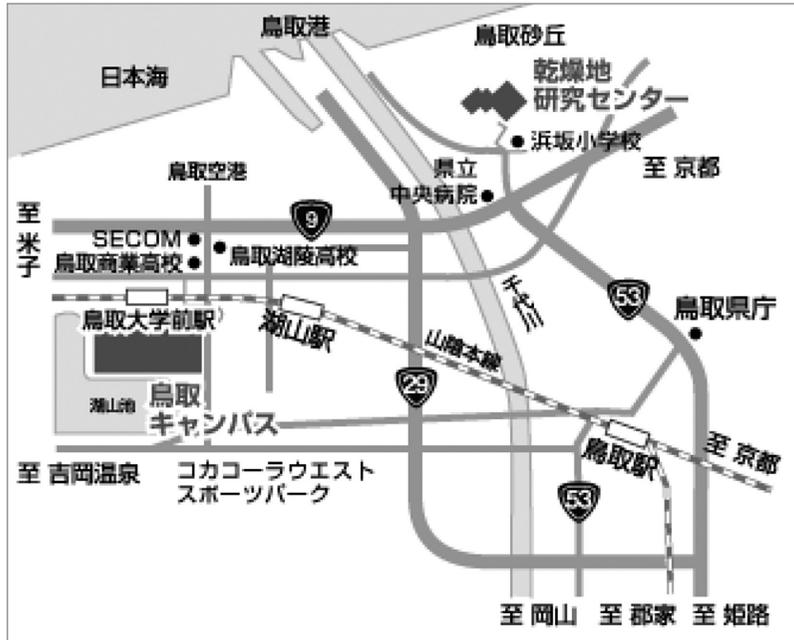
そこで本発表では、哲学的SFの定番とは言いがたい作品——例えば、小松左京『*虚無回廊*』(1987)やスクウェア・エニックス『*NieR: Automata*』(2017)——が、人工知能と比較される人工生命に関して、「人工生命の生の意味」という興味深い哲学的テーマを含んでいる、ということを明らかにする。特に、そうした作品の重要性は人生の意味に関する哲学の観点から評価されるべきであることを示したい。

—交通案内—

大学所在地

〒680-8550 鳥取県鳥取市湖山町南4-101

TEL：057-31-5007



大学への主な交通機関

JR鳥取駅からのアクセス

■JR利用

鳥取駅から山陰本線 鳥取大学前駅下車 徒歩3分

■バス利用(日の丸バス)

鳥取駅バスターミナル(5) 番のりばで乗車

鳥大線「大学前」下車すぐ

湖岸線、鹿野線「鳥商前」下車 徒歩5分

■タクシー利用

鳥取駅から約15分

鳥取空港からのアクセス

タクシーで約5分

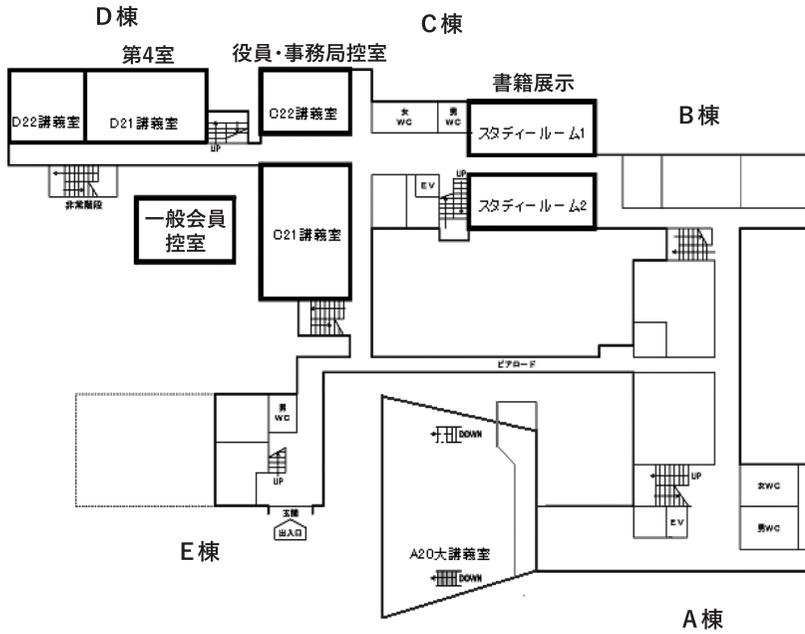
徒歩で約20分

—建物配置図—

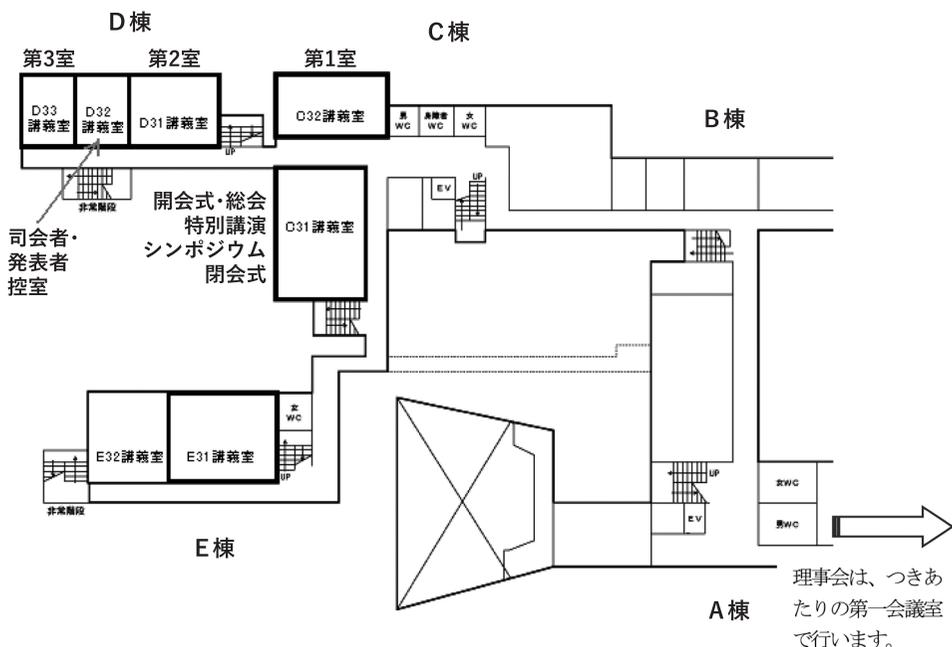


—建物配置図—

共通教育棟（2階）



共通教育棟（3階）



—会場のご案内—

理事会会場	共通教育棟 A棟3階	第一会議室	研究発表会場		
受付	共通教育棟 A棟1階	ウッドデッキ	第1室	共通教育棟 3階	C32講義室
書籍展示場	共通教育棟 C棟2階	スタディルーム1 スタディルーム2	第2室	共通教育棟 3階	D31講義室
開会式・総会 閉会式	共通教育棟 3階	C31講義室	第3室	共通教育棟 3階	D33講義室
特別講演	共通教育棟 3階	C31講義室	第4室	共通教育棟 2階	D21講義室
シンポジウム	共通教育棟 3階	C31講義室	託児室 広報センター スペースD		
司会者・ 発表者控室	共通教育棟 3階	D32講義室			
一般会員控室	共通教育棟 2階	C21講義室			
役員・事務局 控室	共通教育棟 2階	C22講義室			

—懇親会のご案内—

開始時刻： 午後6時00分

会 費： 5,000円(事前Web申し込み)／6,000円(当日申し込み)

会 場： 鳥取大学生協第二食堂

